

た場合、それによるエネルギーの波動傳播がどのようにして地上の気圧変動に影響して来るかも同じ系統の重要な課題である。

次に長期予報法のうち遅期法と呼ぶものについて一言付け加えよう。統計的方法によってすでに相当数の大気の振動遅期が見出されているが、それらが何故卓越しているかの物理的問題となると、不明なものが多い。それらが大気の固有遅期であるというならば、その固有遅期がどのような大気構造に基くものなのであるか。またそれらが単に強制振動であるとするならば、それを起こしている外因が何であるのか。これらの問題が明かにされていくことがこの種の方法の何よりも重要な課題であると考える。(1955年3月9日中央気象台予報課)

引用文献

- Kelvin, Lord, 1882 : On the thermodynamic acceleration of the earth's rotation. Proc. of the Roy. Soc. of Edinb., v, 11, pp. 396~405.
Pekeris, C.L., 1937 : Atmospheric oscillations.

Proc. of the Roy. Soc. of London, Ser. A, v, 158, pp. 650~71.

——, 1948 : The propagation of a pulse in the atmosphere. Part II, Physical Review, v. 73, pp. 145~54.

Scorer, R.S., 1950 : The dispersion of a pressure pulse in the atmosphere. Proc. of the Roy. Soc. of London, Ser. A, v. 201, pp. 137~57.

Taylor, G.I., 1936 : The oscillations of the atmosphere. Proc. of the Roy. Soc. of London, Ser. A, v. 156, pp. 318~326.

Whipple, F. J. W., 1930 : The great Siberian meteor and the waves, seismic and aerial, which it produced. Quart. Journ. of the Roy. Meteor. Soc., v. 56, pp. 287~303.

Wilkes, M. V., 1949 : Oscillations of the earth's atmosphere. Cambridge Monographs of Physics, Cambridge, pp. 1~76.

山元龍三郎, 1954 ; 天文と気象 Vol 20 No 8 pp. 2~5
中央気象台観測部, 1954 : 水爆実験による大気振動調査概報

書 評

オランダ王立気象局発行「長期予報」

オランダの王立気象局から中央気象台の図書課に「長期予報」(Weers Verwachtingen op lange termijn)という本が送られて来た。著者は Dr. Van der Bijl という気象局の職員である。これは気象の啓蒙書の一巻として刊行されたもので128頁の小冊子であるが、通俗書としてはなかなかよくできており、外国で長期予報をどのように見ているかが一応うかがわれる。

まず最初に定義が与えられてあり、一週間以上さきの天気を予報するものを長期予報とし、特に夏または冬の3箇月に対する予報を季節予報と名づけているが、いずれも平均気温や総降水量の予想に限定している。次には長期予報の得失、古代および19世紀までの予想法を述べ、それから20世紀の状態に及んでいる。現代の方法の項では科学的な根拠のない方法について述べた後で各種の科学的方法を簡単に説明している。表題を列挙すると相関法、気圧波、Singularity、気圧のtrend、大気環流の長期変動、高低気圧の進路、類似法、太陽現象、オゾンとなっている。最後に印度、インドネシヤ、ソ連、ドイツ、オランダ、フランス、イギリス、アメリカ、日本の順で各国の長期予報の現状が述べられており、Walker, Braak, Berlageの相関法やSingularity, MultanovskyやPagavaのNatural period、またBaurの汎天候、Namiasの平均上層天気図による方法、高橋氏の遅期法をあげている。本文には理解を助けるための図や表のほかには色刷の挿絵や漫画があり通読したらおもしろいと思われる。読者の中にオランダ語の解る方がおられたら一読の上紹介されるよう御願したい。(須田)

新しい航空気象 橋本梅治、鈴木義男共著

A5—260頁 昭和29年11月刊 450円 気象協会

著者の橋本氏は終戦後の混乱期に羽田航空測候所長として苦心経営にあたり、航空事業の再建に尽力された方です。鈴木氏も羽田にあって航空気象の仕事にたづなわっている第一線のエキスパートです。

このような現場の人が自分の毎日の仕事の土台となっている技術をまとめて公表するという事は次の二つの点で大へん有意義なことだと思います。第一に新しい技術の普及ということは技術がさらに発展するために是非必要なことなので、新しくのびるためには広く根をはることが必要なのです。第二に技術の進歩はこのようにちゃんまとめてみて、どこが不足しているか、どこが完成しているかがはっきりわかり、それをはっきりと見きわめた上で次の新しい発展の段階に入るからなのです。

15章と付録からなり、各章とも航空との関連に特に関心がはらわれているが、第10章以下は特に航空気象プロパーの問題をとりあつかっている。10章以下の項目をあげてみると第10章航空機の着氷、第11章気象と飛行計画、第12章気圧配置飛行、第13章飛行を計画するための天気予報、第14章地上天気図解析、第15章高層天気図解析となっていて、全体の頁数の約半分がこれにあてられている。各章とも末尾に問題集があり、この書物が教科書として使われる場合に大へん便利である。戦後その様相を一変した航空気象を新しく学ばれる人には必読の書物といえよう。誤植や活字の組方の不ぞろいなどがかなり目立つが、改版の時には訂正されたい。このような良書が広く普及するためにも450円という値段は何とかならないものなのだろうか。(根本)